学校番号	327

令和８年度　数学科（普通科）

教科	数学科	科目	数学Ⅰ	単位数	３単位	年次	１年次
使用教科書	改訂版　新編「数学Ⅰ」　（数研出版）						
副教材等	改訂版　書き込み式シリーズ　【標準】　教科書傍用　Study-Up ノート　数学Ⅰ（数研出版）						

1　担当者からのメッセージ（学習方法等）

・授業では、課題に対して、自ら考え、周りの人と共同で考える活動を行います。
・「課題を理解する→結果を予想する→解決の方向を構想する→解決する→解決の過程を振り返ってよりよい解決を考える」といった一連の過程で、自分の考えを発表したり、議論したりする活動を行います。
・教科書や問題集の問題をまず自分で解いてみましょう。ただ答えを求めるだけでなく、途中式や考え方も書くようにしましょう。また、各自答え合わせをしてください。答え合わせは、自分がどこでつまずいたかを知るための大切なものです。
・家庭学習における課題は、定期的に提出してもらいます。最後まであきらめずに取り組みましょう。
・授業中のノート（プリント）は板書を書き写すだけでなく、授業のポイントや自身で気づいたことなどを記入していきましょう。

2　学習の到達目標

数と式、図形と計量、２次関数およびデータの分析について

【知識及び技能】

基本的な原理・法則を理解し、公式等を用いて適切に解答を導くことができる。

【思考力、判断力、表現力等】

解答に至るまでの過程が論理的で、適切に数式等を用いて表現できる。

常に批判的に考察し、よりよい解法を目指して考察し、改善していくことができる。

【学びに向かう力、人間性等】

数学のよさを認識し、それらを活用する態度をもって問題に取り組める。

3　評価の観点及びその趣旨

観点	a:知識・技能	b:思考・判断・表現	c:主体的に学習に取り組む態度
観点の趣旨	数と式、図形と計量、二次関数及びデータの分析について基本的な概念や原理・法則を体系的に理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に着けている。	命題の条件や結論に着目し、数や式を多面的にみたり目的に応じて適切に変形したりすることができ、図形の構成要素間の関係に着目し、図形の性質や計量について論理的に考察し表現することができ、関数関係に着目し、事象を的確に表現してその特徴を表、式、グラフを相互に関連付けて考察することができ、社会の事象をなどのから設定した問題について、データの散らばりや変量間の関係などに着目し、適切な手法を選択して分析を行い、問題を解決したり、解決の過程や結果を批判的に考察し判断したりすることができる。	数学のよさを認識し数学を活用しようとし、粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断しようとし、問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとしている。
上に示す観点に基づいて、学習のまとまりごとに評価し、学年末に５段階の評定にまとめます。学習内容に応じて、それぞれの観点を適切に配分し、評価します。			

4　学習の活動

学期	単元名	学習内容	単元(題材)の評価規準	評価方法		
				知(a)	思(b)	主(c)
1学期	第1章　数と式	第１節　式の計算 １　多項式の加法と減法 ２　多項式の乗法 ３　因数分解	a:　乗法公式及び因数分解の公式の意味や複雑な式が簡単な式に帰着できることを理解している。乗法公式や因数分解の公式などを用いて、式を目的に応じて変形することができる。 b:　一つの文字に着目したり、一つの文字に置き換えたりするなどして、いろいろな式の見方をすることや、目的に応じて、的確に式を変形する方法を考察することができる。 c:　具体的な事象の考察に式の展開や因数分解などを活用しようとしている。	定期考査 確認ﾃｽﾄ	定期考査 レポート 課題	ノート (授業プリント) ワーク プリント課題 振り返りシート 観察

		第2節 4 実数 5 根号を含む式の計算	a: 数を実数まで拡張することの意義や実数が数直線上の点と１対１に対応していることを理解している。簡単な無理数についての四則計算ができる。 b: 数を拡張してきた過程や数の四則計算の可能性について考察することができる。 c: 数の体系を拡張する過程や数の四則計算に関心をもち、それらを数の考察に活用しようとしている。			
		第3節 6 不等式の性質 7 1次不等式 8 絶対値を含む方程式・不等式	a: 不等式の意味や不等式の性質及び一次不等式とその解の意味を理解し、一次不等式で表したり解を求めたりすることができる。 b: 一次不等式の解について、数直線と対比したり、いろいろな数値を代入したりして考察することができ、不等式の性質を等式の性質と対比して捉え、不等式の性質を基にして、一次不等式の解き方を考察することができる。 c: 数量の関係を不等式で表すことのよさを捉え、それらを具体的な事象の考察に活用しようとしている。			
	第2章 集合と命題	1 集合 2 命題と条件 3. 命題とその逆・対偶・裏 4 命題と証明	a: 集合と命題に関する基本的な用語・記号、概念、法則を理解している。 b: ベン図などを用いて数学の対象を整理しそれらを多面的・統合的に見たり、事象を命題として表現し、考察したりすることができる。 c: 集合の包含関係と命題を関連付けて捉え、それらを命題の考察に活用しようとしている。命題の逆・待遇・裏の定義と意味を理解しており、それらの真偽を調べようとしている。			

2学期	第3章　2次関数	第1節　2次関数とグラフ 1　関数とグラフ 2　2次関数のグラフ	a:　２次関数の式やグラフの特徴について理解している。グラフの平行移動・対称移動について理解している。グラフの軸と頂点を調べ、グラフをかくことができる。グラフの対称移動の一般公式を利用して、対称移動後の放物線の方程式を求めることができる。 b:　２次関数の式とグラフを関係付けて考察することができる。放物線の平行移動を、頂点の移動に着目して考察することができる。 c:　２次関数とそのグラフについて関心をもち、それらを二次関数の考察に活用しようとしている。	定期考査 確認ﾃｽﾄ	定期考査 レポート 課題	ノート （授業プリント） ワーク プリント課題 振り返りシート 観察
		第2節　2次関数の値の変化 3　2次関数の最大･最小 4　2次関数の決定	a:　２次関数が最大値または最小値をもつことを理解している。２次関数のグラフや式を用いて、２次関数の最大値・最小値を求めることができる。 b:　２次関数の値の変化の様子について、グラフを用いて考察することができる c:　２次関数の値の変化に関心をもち、具体的な事象の考察に２次関数の最大･最小を活用しようとしている。			

		第3節　2次方程式と2次不等式 5　2次方程式 6　2次関数のグラフとx軸の位置関係 7　2次不等式	a:　２次関数のグラフとｘ軸の位置関係と２次方程式の解との関係を理解している。２次不等式の解の意味を２次関数のグラフとの関係から理解している。２次関数のグラフを活用して２次不等式の解を求めることができる。 b:　２次方程式が解をもつための条件を式で表すことができる。２次不等式の解を２次関数のグラフを用いて考察することができる。２次不等式の解と２次関数の値の符号を相互に関連させて考察できる。２次式が一定の符号をとるための条件を、グラフを関連させて理解している。 c:　２次関数のグラフとｘ 軸の位置関係を調べ、その意味を探ろうとする。２次不等式を解くときに、図を積極的に利用する。			
	第４章　図形と計量	第1節　三角比 1　三角比 2　三角比の相互関係 3　三角比の拡張	a：三角比の意味を理解し、値を求めることができる。三角比の相互関係について理解し、与えられた三角比の値から残りの三角比の値を求めることができる。鈍角まで拡張した三角比の意義を理解している。 b：具体的な事象を三角比の問題としてとらえることができる。三角比の相互関係や鈍角まで拡張した三角比について考察することができる。 c:　鋭角の三角比や三角比の相互関係に関心をもち、それらを直角三角形の計量に活用しようとしている。鋭角の三角比を鈍角まで拡張する考えに関心をもち、それらを図形の性質の考察に活用しようとしている。			

3学期		第2節 4 正弦定理 5 余弦定理 6 正弦定理と余弦定理の応用 7 三角比の面積 8 空間図形への応用	a：正弦定理・余弦定理を三角形の決定条件と関連付けて理解し、三角形の決定条件が与えられたとき、三角形の残りの要素を求めることができる。 三角形の面積の求め方について理解し、求めることができる。三角比や正弦定理・余弦定理を用いて平面図形や空間図形の計量をすることができる。 b：正弦定理・余弦定理を導く過程を考察することができる。平面図形や空間図形の計量に活用するために正弦定理・余弦定理の式を多面的に見ることができる c：三角比や正弦定理・余弦定理が有用であること認識し、それらを図形の計量に活用しようとしている。	定期考査 確認ﾃｽﾄ	定期考査 レポート 課題	ノート （授業プリント） ワーク プリント課題 振り返りシート 観察
	第5章 データの分析	1 データの整理 2 データの代表値 3 データの散らばりと四分位数 4 分散と標準偏差 5 2つの変量の間の関係 6 仮説検定の考え方	a：四分位数、四分位偏差、分散及び標準偏差などの意味を理解し、求めることができる。 仮説検定の考え方を理解し、具体的な事象に当てはめて考えることができる。 b：四分位数、四分位偏差、分散及び標準偏差などを用いてデータの傾向を捉え、それらを的確に表現することができる。 不確実な事象の起こりやすさに着目し、実験などをとおして、問題の結論を判断したり、その妥当性について火判定に考察したりすることができる。 c：四分位数、四分位偏差、分散及び標準偏差などを用いてデータの傾向を把握し、それらを事象の考察に活用しようとしている。 身近な事柄において、仮説検定の考え方を活用して判断しようとする態度がある。			

※　表中の観点について　a:知識・技能　b:思考・判断・表現　c:主体的に学習に取り組む態度